

## 24 フランス国立極東学院と東京国立博物館の文化財交流（2021年1月12日）

前回取り上げたフランス国立極東学院（EFE0: Ecole Française d'Extrême-Orient）と日本とのつながりについて、もう一つ別のエピソードをご紹介します。

東京国立博物館は、1872年（明治5年）に開館した日本で最も歴史が古く、最大の博物館です。6つある展示館のうち、東洋館（アジアギャラリー）は、中国、朝鮮半島、東南アジア、インドやエジプトなどの美術品や考古遺物を展示しています。その中で、クメール彫刻を展示しているコーナーがあります。実は、そこにある彫刻は、第二次世界大戦中に、当時は仏領インドシナ（現在のベトナム）のハノイに本部を置いていたEFE0と東京国立博物館（当時は東京帝室博物館）との間で美術工芸品の交換によって日本にもたらされたものです。



ナーガ上の仏陀座像  
東京国立博物館所蔵

1943年（昭和18年）に、東京国立博物館は日本の美術工芸品31点をEFE0に贈り、翌年にはEFE0が、9世紀初頭から600年余り続いたクメール王朝（アンコール王朝）時代の彫刻、ブロンズ、陶器など計69点を東京国立博物館に贈りました。この交換を仲介したのは、現在の国際交流基金の前身である国際文化振興会でした。

EFE0が東京国立博物館に贈った彫刻類は、同館が保管しているのに対して、東京国立博物館がEFE0に贈った作品の所在については、長く行方不明とされてきました。しかし、2013年に日本の文化庁がベトナムで行った展覧会準備のために九州国立博物館が実施した調査によって、東京国立博物館がEFE0に贈った美術工芸品のうち、21点がベトナム歴史博物館の収蔵庫で保管されていることが確認され、その展覧会で展示されました。



蒔絵飾箱  
ベトナム歴史博物館所蔵

当時のEFE0が東京国立博物館に贈った美術品としてクメール彫刻を選んだ理由は分かりませんが、日仏両国が共同議長を務めるユネスコのアンコール遺跡保存修復国際調整委員会を含めて、現在のアンコールワット遺跡の調査研究を主導しているのは日仏両国であることと関係があるのかもしれませんが。東南アジアにおいても日仏文化交流の歴史があったことは、新たな発見でした。